

# 郷土室だより

第 3 号

昭和49年 1月15日 初刷

平成 6年 3月31日 2刷(500)

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 3543-9025

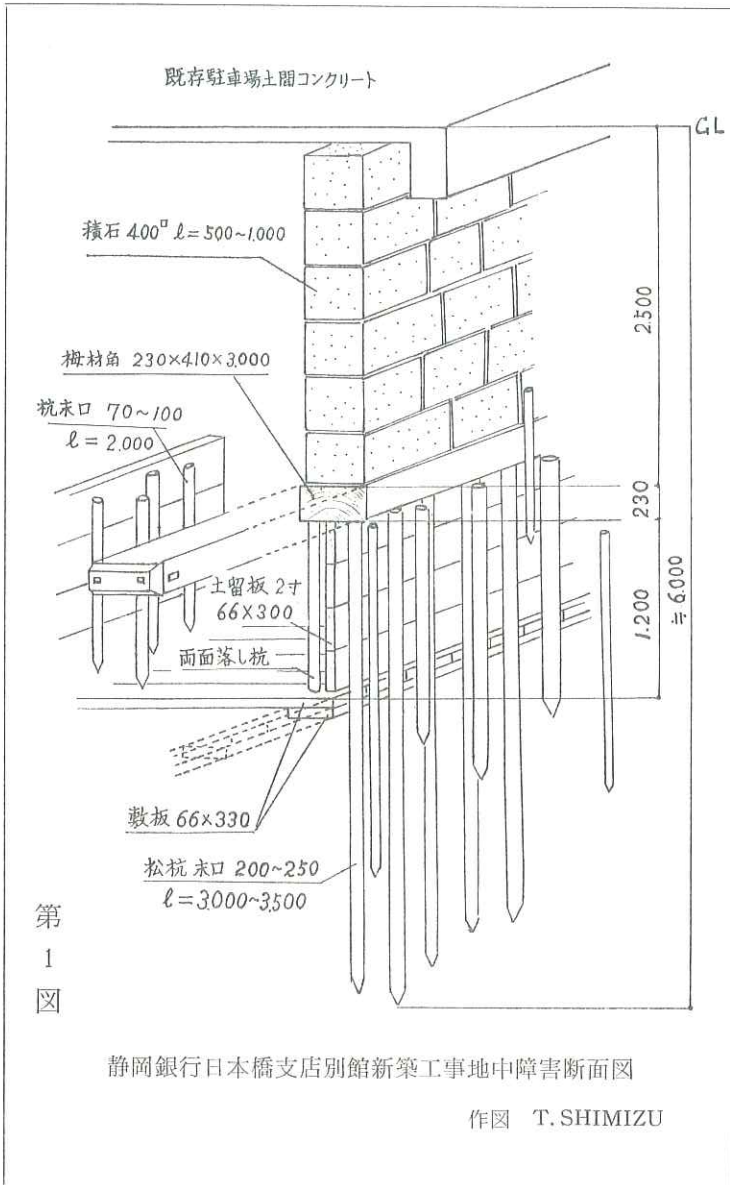
## 地下の埋蔵物

日本経済の中枢地中央区では、眼をみはるような、さん新な設計をこらした高層建築が、次々誕生して、日ごとに大都会としての景観を描き改めつつある。

これらのビル建設に当って、時折地下の埋蔵物が発見されるが、人骨とか、ナウマ

ン象の骨とか、あるいは小判でも出ぬかぎりは、おおむね問題にもされず、ダンブカで埋立地へ運ばれ、棄てられてしまう。地下埋蔵物の出土に際しては、簡単でよいかから、出土状況の調査報告がなされる必要がある。小さな報告でも、類例の比較検討に役立つことが多いからである。

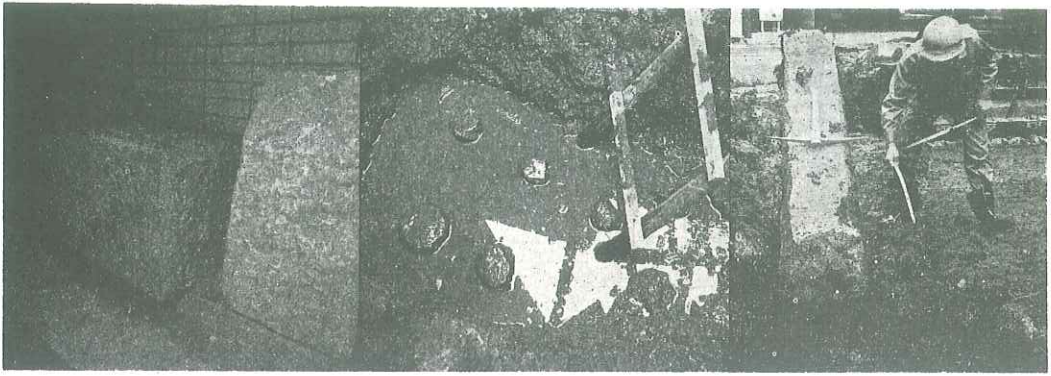
報告が寄せられた。発掘状況は、直接工事担当によってなされることが最も望ましいけれども、なかなかそこまで手が廻らぬらしい。そこでとりあえず、忽忘に備えて、聞く所を録し、参考に供することとする。報告を寄せられた、静岡銀行日本橋支店長高林氏、塩谷次長、野末氏、電信電話公社の窪田孝司氏に厚く感謝の意を表する。



静岡銀行日本橋支店別館新築工事地中障害断面図

作図 T. SHIMIZU

次頁の現場写真2枚とも、静岡銀行日本橋支店提供



## 二件の発掘報告 安藤 菊 二

### 1 大伝馬町の石垣

去る一〇月三〇日、静岡銀行日本橋支店の野末氏から電話連絡を受けた。

今年（四八年）の四月頃、銀行の建築現場から石垣を発掘したが、あまり見事なので棄てるに忍びないし、この儘にしておくわけにもゆかず、何かよい思案があったら教えてほしいという内容であった。

取りあえず見ておくことにして、広報室写真班の笠川氏に同行を頼んだ。

銀行の所在地番は、本町三丁目四番地、区画整理前の大伝馬町一丁目二七番地に相当する。発掘現場はどこなのかと思いつつ、銀行の扉を排した。

ロビーの一隅の床の上に、カサカサにひび割れた木肌を見せて、丸太や厚板が一山にしておいてあった。

丸太の材質はたぶん松であろう。一番長いものは三層八八寸あった。先端はそいで尖らせてある。

板材は、厚さ二二寸、長さ三層九二寸、中四二寸。板というより梁材というに近い。一枚の板は、一端を斜にそいで、先端を八寸ほどの厚さとし、端

近い表面に二つ、側面に一つ、かぎでも懸けるような、小さな角穴（八×四寸）があげてあった。

発掘した石材は、銀行の南側の側溝に添って並べてあった。大きな角石で現在一〇個ほど残してある。一番大ぶりの石を測ってみると、縦七三寸、横四四寸、高さ四四寸、かなりな大きさである。石面は四面とも、ノミ切りにして平面にしてある。人夫が六人懸りてここへ運んだそうである。

#### ○

高林支店長の説明を綜合すると、地表から七〇〜八〇寸の深さで最初の石面にぶつかり、掘り進めるに従って石が出て、角石六層を積んだ下に厚板が敷かれ、その下部に松丸太がチドリに打ってあった。石は南北方向、つまり道路に直角に、一直線に並んでいて、発掘した石は、三〇個に近かったという。

それから、も一つ不可解なことに、打込んだ松丸太の深さ一層辺の個所に厚板が床のように敷かれてあったそうである。

垂直の切石積だが、用途はちよつと

見た所では石垣のような感じがする。最初は護岸の石垣ではないかという意見が有力であった。この石積の南方延長線上に、今は埋立てられてしまった西堀留川があるからである。護岸となれば、問題は重大である。しかし、その堀川との関係はないと思われる。

寛永江戸図を見ても分るように、西堀留川は、もとの堀留町、三越前の、江戸時代の俗称「浮世小路」の所で堀留であった。南に一町ほどの隔りがあるのである。

#### ○

石積発掘地点は、前記支店と道路を南に隔てて南東にある同行の新築ビルの地下であった。地番は旧時の大伝馬町一丁目三番地に当るであろう。

この新ビルと側壁を接して、豪華華麗な小津本社ビルが建っている。そしてこのビルの東北角、問題の石垣発掘地点とわずかに歩巾一五・六歩を離れた弧状の壁に、「史蹟、於竹大日如来井戸跡」とした史跡表示がなされている。

お竹という女性——大日如来の化身といわれたこの女性の働いていた家は、慶長以来大伝馬町で、公儀御伝馬役を勤めていた、旧家佐久間平八の家であった。伝説は余談にわたるから省略するが、その御伝馬役佐久間氏の旧地と

接して、この石垣が出てきたということとは、何か関係があるであろうか。

○ 本町通りを中心とする日本橋以北の主要商店街は、天正一八年（一五九〇）、江戸開府と同時に町割をし拓開した、江戸最初の市街地である。

福田村や、馬喰達の住む村々のあった田圃地帯を埋立て、造成された最初の街―それも商店街である。その後、慶長八年（一六〇三）に、例の豊島洲崎の大埋立工事によって、浜町以南、それに通町・銀座から新橋にかけての土地が造成され、更に二年後、慶長一〇年（一六〇五）、徳川氏の江戸城拡張工事に際し、それまで江戸城前面の千代田村に住んでいた、御伝馬役の馬込勘解由や佐久間平八・宮部又四郎らが新開地に転出を命ぜられて、馬込・佐久間氏らは大伝馬町を興し、宮部又四郎は小伝馬町を起立したという。その際に、市街地を横切って、河川用の石垣工事を施行することは万ありえない。

よし仮に、此処にこのような巨石を使用した河岸があったとしたら、江戸近郊の墓石まで悉く投入したという、慶長一〇年以降の江戸城城廓の築城に際して、放っておくはずもなく、真先に供出を命ぜられたにちがいない。

○ この遺構上の表層は、七・八〇センチ厚さであったという。

江戸市街は、慶長以来数十回におよぶ大火で焼けている。火災跡地の焼土は灰掻きをして、埋立地に投棄して土地造成を計ったことは今日と同じで、大火後の焼跡市街が、道路を含めて一挙に三〇センチも四〇センチも堆くもなかるうけれど、それにしても、前記の石垣のような構築物が、江戸初期もしくはそれ以前のものであると仮定した時の、地表の厚さが七・八〇センチということはあるまい。

○ 出土した石材や木材は東京都の社会教育部文化課の方へ全部移されたというから、いずれ調査報告がなされるであろうが、銀行の御好意で図面や写真を拝借したので、ここに思いつくまま私見を書いてみるのだが、この稿を書きかけて写真を借りにいった時、塩谷次長の口から、大商店の地下室倉庫ではないかという意見が出ていたということも聞いた。言われてみれば、これが一番妥当な推定のように思われる。私は、紺野浦三氏（川喜田久大夫翁の狂名）の『大伝馬町』に「小津の馬鹿蔵」という一項のあったことを憶い出した。同書は前記の「お竹大日如来」

の話を書いてその没年に言及し……

（上略）大正十二年の震災頃迄、

日暮里の渡辺町に居た、馬込（佐久間の改称）の遺族の云ふには、延宝八年五月十九日と蜀山人の一話一言と同じですが、大伝馬町の佐久間の屋敷跡に住んで、お竹大日の仏像を祭って居たといふ小津の店では、二十三日を命日として居るそうである。馬鹿蔵と呼ばれた大蔵の中に、お竹の使った井戸があると聞きましましたので、最近私は実地調査に行つて見ますと、「馬鹿蔵」は震災で焼けてしまい、井戸は埋められて石の破片が僅かに井戸の所在を存して居るだけで……

と書いてあるのである。前記の遺構はそのいわゆる「馬鹿蔵」（不必要に堅牢な蔵の意）なるものの地下倉庫だったのであるうか。しばらく記して、疑いを存しておく。小津家の屋号は「小津屋清左衛門」元禄一年に小津屋源兵衛経営の木綿問屋を譲受けて大伝馬町組の木綿問屋となり、幕末嘉永の頃には、紙・練綿・真綿の問屋として、江戸屈指の大問屋であったし、明治・大正・昭和三代の波瀾を乗切つて、現に隆々たる繁栄を続けている。

## 2 銀座の石垣

三年前の、昭和四六年六月二三日に銀座一丁目二六、京橋小学校前、電々公社の会館建設工事現場から、人骨が出て、翌二四日の毎日新聞の雑記帳欄にちょっとした記事が載り、出土人骨は河越逸行博士が、約二百年前の壮年の男子と鑑定されたことが付記してあった。発掘されたのはそれだけかと思つていたら、電々公社に勤務しておられる、窪田孝司氏から、同じ工事で木杭の列や巨石が見つかつているとの報知に接した。この報知もまた重要なものであるから、併せて報告しておきたい。

電々公社の京橋会館は、新富町から銀座へ渡る新金橋西側の袂にあり、京橋小学校と相對している。

この辺は震災後の区画整理で大変動のあった所である。明治三九年までは白魚橋下真福寺橋の所で分岐した三十三間堀川が、大富町のあさり河岸の南端で直角に西に折れ、白魚河岸に添って銀座一丁目表に出て、更に南に屈折し南走して汐留川に合流していた。寛永江戸図で見ると、この堀川に添った東南の埋立地には、紀州家や尾州家などの大名の蔵屋敷が設定されているが大まかに言つて、三十間堀川が当時の

南端境界をなしていたといつてよい。

窪田氏の報知を受けた時、私はすぐに、明治三十九年に三十間堀川の埋立新掘工事の際に、水谷町一現、銀座一丁目八番地辺りで、巨石や人骨・帆柱などの発掘されていることを想起した。

この時発掘された大石の位置は地下一五尺(約五呎)、大きな石は六尺×三尺(約二呎×一呎)、小さいものでも五尺×四尺(約一呎五〇寸×一呎二〇寸)、厚さ二尺五寸(約七五寸)におよび、巨石七個が、東西に堀に添った形で埋もれていた。慶長八年の豊島洲崎の填築の際に築いた、防波堤の礎石かも知れないというのが、当時、学者の一致した意見であった。

京橋会館建設に際して発見されたという木杭や石積や巨石群と、前記発見の巨石群との距離は、歩巾三百数十歩を隔るに過ぎない。

巨石発掘現場の状態は、窪田氏が詳細な手紙を寄せられたので、同氏の報告に依拠して概況を記しておく。

(1) 工事現場の地質は、一層〜三層埋立土、三層〜六・七層粘土、以下一三層までは砂で、岩盤に達した。ただし、場所により高低がある。

(2) 会館建物敷地の南東部、地中四層〜五層の個所で、二個の巨石が発見された。いずれも四尺×四尺×八尺。

(一層三三二×一層三三二×二層六四)。

二個の巨石は、約五層の間隔をおいて南向し、東西方向に一直線をおいていた。なお、巨石には紋所か何か刻してあったようであるが、泥土にまみれていてよく分らぬまま処分されてしまった。〔第3図〕参照。

(3) 巨石とは別に、敷地の北東部に鍵の手になって石積が発見され、石積に添って水道の木樋が発見された。

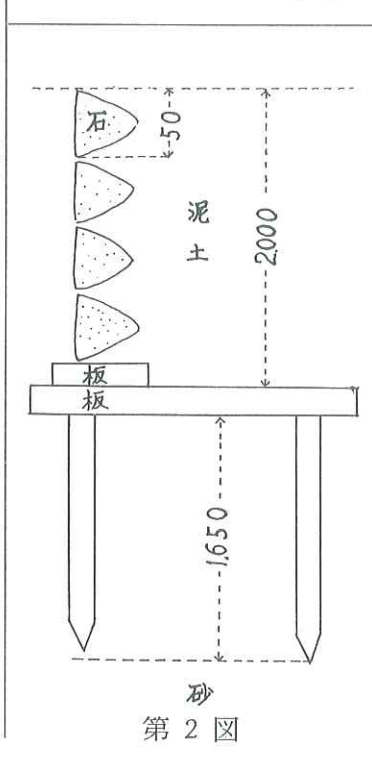
石積の見取図を示すと〔第2図〕のごとくであった。木杭の上に板を渡し重量を分散する方法を「いげた地形」というそうである。

(4) 前記石積とは別に橋杭が発見された。〔第3図〕の(4)の個所から四・五本づつ計一〇本、(5)の個所からも四・五本づつ一〇本など合計二〇数本。杭の長さはいずれも長さ一二尺(約四

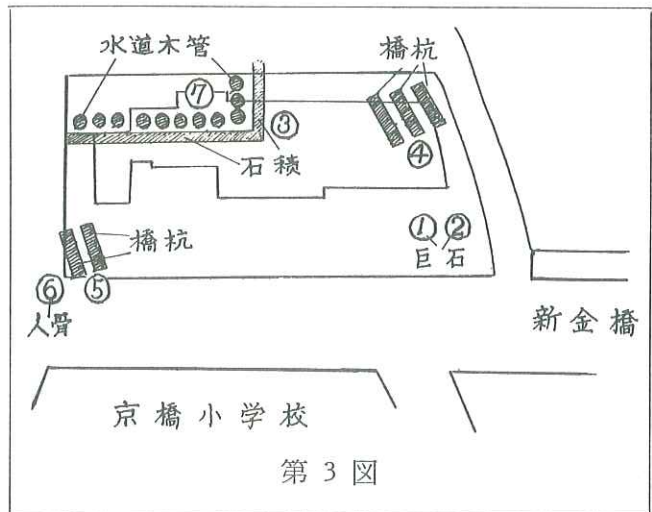
尺)、先端は尖らせてある。

(5) 〔第3図〕の(6)の個所から、男子の頭骨が一個発見された。

以上を総合して考えてみると、(1)・(2)の巨石は、明治三十九年に水谷町で発見された巨石群と、明らかに関連があり、慶長八年の大埋立工事の際、護岸のために据えられた基礎石と考えてまず誤るまい。水道の木樋を伴って発見された石積は同期かあるいは若干時代の下の護岸遺構と考えてよからう。



第 2 図



第 3 図

催し物のお知らせ

◇ 東京を語る会 第11回

日時 昭和49年1月19日 土曜日

午後二時〜四時

演題 「江戸の春の年中行事」

郷土史家 前島泰彦 先生

御参加をお待ちしております。